

のぼりの城

公開記念

原作・脚本

和田竜

インタビュー



のぼうの城

いよいよこの秋に公開される映画『のぼうの城』。

この度、原作・脚本の和田竜さんのインタビューが届きました！！



20,000人VS500人！天下の豊臣軍にケンカを売ったでくのぼうがいた。

大ベストセラー奇跡の映画化！大逆転のスペクタクル・エンタテインメント超大作！

その圧倒的なスケールゆえ、映画化実現まで**8年**の時間を要した、

興奮と感動のスペクタクル・エンタテインメント超大作『のぼうの城』が、**11月2日（金）**ついに公開！

本作は、歴史小説ファンに加え若者と女性の心をつかみ、累計175万部を突破した大ベストセラー

の映画化。『ゼロの焦点』の犬童一心と、『日本沈没』の樋口真嗣の異例の“ダブル監督”が、日本映画史を塗り替える壮大なスケールで描き出します。

STORY

あの豊臣秀吉、石田三成が、歴史上、唯一攻略できなかった城があった！

本能寺の変から8年、1590年。戦国末期。天下統一を目前に控えた豊臣秀吉は、関東の雄・北条家に大軍を投じた。

そのなかで最後まで落ちなかった支城があった。武州・忍城（おし・じょう）。周囲を湖で囲まれた「浮き城」の異名をもつ難攻不落の城である。城代は、成田長親といい、領民からでくのぼうを揶揄した「のぼう様」と呼ばれても意に介さず、将に求められる智も仁も勇もない、文字通りでくのぼうのような男。外見からはおおよそ窺い知れない誇りを持ち、底知れないスケールの大ききで、人心を掌握していた。2万の軍勢を従えた石田三成は忍城を包囲する。総大将たる「のぼう様」長親には、物量にものを言わせ問答無用の戦略をとる三成軍20,000もの大軍を前に、領民も一体となった＜忍城＞の猛者たちは一歩もひかず迎え撃とうとしていた。その数わずか500騎！この絶体絶命の状況下、一丸となって立ち向かうのぼう軍に対し、石田三成は、秀吉が得意とする“水攻め”という驚天動地の戦術を発令！その勝敗が誰の目にも明らかに見えたとき……戦は、意外な進展を見せていく。

CAST

野村萬斎 榮倉奈々 成宮寛貴 山口智充 ・ 上地雄輔 山田孝之 平岳大
西村雅彦 平泉成 夏八木勲 中原丈雄 鈴木保奈美 ・ 前田吟 中尾明慶
尾野真千子 芦田愛菜／市村正親／佐藤浩市

監督：犬童一心 樋口真嗣

脚本：和田竜（小学館「のぼうの城」）

音楽：上野耕路

主題歌：エレファントカシマシ 「ズレてる方がいい」（ユニバーサル シグマ）

制作：C&Iエンタテインメント、アスミック・エース エンタテインメント／製作：『のぼうの城』フィルムパートナーズ／配給：東宝、アスミック・エース

『のぼうの城』11月2日（金）全国超拡大ロードショー

公式サイト：<http://nobou-movie.jp/>

facebook:<http://www.facebook.com/nobousama>

twitter：https://twitter.com/nobou_movie

(C)2011『のぼうの城』フィルムパートナーズ



■脚本のテーマに忍城攻防戦を選んだきっかけは何ですか？

きっかけは、僕が繊維業界新聞の会社員だったときに行田市から通っていた同僚です。彼に、僕が歴史好きで脚本を書いていることを伝えたら、「実は行田市には“忍城”という城があって…」と教えてくれました。それまで「忍城」は全然知りませんでした。調べて興味を魅かれたのが、石田三成や大谷吉継、長束正家という“関ヶ原のビッグネーム”が埼玉県に来ていたことです。僕にとって、三成と言えば滋賀県から京都の「中央」というイメージが強かったので新鮮でしたね。秀吉の関東攻めは有名なエピソードですから確かにあり得る話だなと関心を持ちました。他には、「水攻め」があったところです。秀吉が水攻めを好んでやったというのも有名な話なので、ここで三成がやったのは何か意味があるなと思いました。その後、文献は、成田側、豊臣側、北条側の三方向から書いたものを読みました。

■“のぼう様”の人物像ができるまでの経緯を教えてください。

理由はいくつかありますが、基本的には成田家側から書いた史料の中から人物像を考えていきました。織田信長や上杉謙信のように部下をグイグイ引っ張る「猛将型」の人物ではなく、軍議においても配下の武将が侃々諤々（かんかんがくがく）やっているときに調整役を務めているところが、いわゆる戦国武将とはちょっと違うイメージを持ちました。

また、僕は物語の構成の中で、配下の武将も皆さんに見てもらいたかったんです。これまでの歴史モノとりわけ映画やドラマは、例えば織田信長を描いたら信長しか目立たない。その配下の人には分かってもらってもせいぜい秀吉くらいというような、知識を持った人のためのもので、それ以外の人たちは観なくていい、というような作りになっていたんじゃないかと思ったんです。敵もそうですが、配下の武将たちも目立つようにしたいと思ったとき、仮に成田長親を「猛将型」にすると、彼らはその「二番手」にすぎなくなってしまいます。そこで成田長親を“のぼう様”のようなキャ

ラクターにすると、配下の武将たちも見てもらえるんじゃないかと思いました。

他にも、史実には百姓たちが忍城にこもって戦った様子が描かれており、彼らが戦った姿を描きたかったんです。百姓が能動的に働きたくなるような城主とはどういった人物だったんだろうか、という物語上の都合と史実との関係から“のぼう様”ができていきました。

■“のぼう様”の名前の由来は何ですか？

とかく歴史上の人物は堅い名前が多いので、あだ名を付けたいなと思いました。始めは「ウドの大木」という感じが欲しいなあと考えたけれど、「ウド」はウド鈴木さんがいるし、西郷隆盛が体格が大きい、眼が大きいという意味から「うどさ」「うどめさ」と呼ばれていたもので、そこと被りたくないなあと考えていたときに「でくのぼう」が浮かびました。ただ、「でく様」というのも語感が悪いなと思ったんです。そこで、言葉を切るべきところで切らないと新たな語感が生まれるという理屈から、「でく」や「ぼう」ではなく「の」から切った「のぼう」だと、そして“ぬぼ〜”としたようなイメージに派生していく語感になったことから「のぼう様」を見つけました。



■甲斐姫が惹かれた“のぼう様”の魅力とは何でしょうか？

甲斐姫が惚れたのは、彼女自身が“のぼう様”に救われたことがきっかけです。甲斐姫という人物は、成田家側の史料の中では腕っぷしも強く、秀吉の側室になるほどの美人だったことがわかります。そういう「鋭い人」が好きなのは、正木丹波のような理屈っぽくて立派な人ではないのではないかと。逆に、正反対の性格でもある成田長親に惹かれたんじゃないかなと思います。

■配下の武将たちの人物像はどのように作りましたか？

甲斐姫や正木丹波守は史料が十分あったので、そこから作りました。例えば、史料の中でも正木は戦が上手く、戦の後は敵の死者も吊う一種の理想的な男性の姿もあるので、人物像がで

てきました。一方、柴咲和泉守という人物は史料には長野口で戦ったという名前くらいしかない
ので、他の史料から想起した、いわゆる典型的な戦国時代の人物として創作して描きました。

■城戸賞の受賞から小説化、映画化までの経緯を教えてください。

城戸賞を獲ったときは凄く嬉しかった一方、凄くいいものが書けたという気でしたので、「やっ
ぱり獲れたか」という2つの気持ちがありました（笑）。城戸賞を獲ったときに映画化の話は
なく、受賞から数か月後に、プロデューサーの久保田さんから映画化をしたいとの話を頂きま
した。ところが、今の映画界はベストセラーの小説や漫画が原作になっていて、「ただの脚本」
だけでは話題性がないんですよね。「じゃあ、小説を出してしまえ!」、という久保田さんの意
向で僕が小説を書かされました（笑）



■映画化が決まったときの気持ちを教えてください

脚本を書いたときは、「老若男女に見てもらえる映画にしたい」と、応募作品のくせに目論んで
書いていました（笑）。いかにも物語らしい史実を物語らしく再構成して書いたものが、それに
相応しいような「いかにも大作っぽいキャスティング」で実現して嬉しいですね。

■脚本と小説で内容に違いはありますか？

脚本と小説は、基本変わらないですね。あえて挙げるのであれば、小説の魅力は色々書き込める
ことにあります。僕は、その時代の細かな気分を脚本で表して、現代人とまるで違うんだとい
うことを感じてもらいたいんです。映画は映像の中から感じればいいし、小説はきちんと言葉にし
て証明することができる。そういう所は小説の利点であり面白いと思うところですね。脚本を書
く際、既に資料で調べていたので、小説を書くときにあまり苦労はありませんでした。脚本とい
うのは、3割りくらいがト書きであとはほぼセリフです。セリフの中にある歴史的な背景などを踏
み込んで書いてしまうと逆に映画の魅力を損なってしまいかねないので省いています。小説には

、脚本で描けなかった自分がもともと持っていたビジュアルに歴史的背景、キャラクターの心情を書き加えました。

■“のぼう様”は野村萬齋さんをイメージして描かれたのでしょうか？

また、萬齋さん演じる“のぼう様”はいかがでしたか？

脚本を書いて久保田さんが気に入って下さり、映画化の際に萬齋さんはどうかという話が持ち上がったという順序なので、萬齋さんをイメージして作ってはいないですね。ですが、セリフの言い回しなどは、僕は自分で抑揚をつけて口の中でモゴモゴ言いながら脚本を書いているんですけど、僕のイメージと萬齋さんの言い回しは全然違いました。それがかえって、なるほど感があるんですよ。

多分、映画をご覧になる方の中には、「田楽踊り」のために萬齋さんがキャスティングされたと思う方がるかもしれませんが、実はそうではないんです。プロデューサー曰く、“のぼう様”と萬齋さんの雰囲気重視したようです。実際、萬齋さんの持っている独特の雰囲気が映画全体に生きていて、この人じゃなかったら意外と凡作になっていたとさえ思うほどはまっていました。人それぞれ個性があるので「こういう人は他にいない」と言うのも当たり前なんですけど、「本当にこういう人はいない」という感じの人ですから、萬齋さんが40代で、クランクインをして、人間として生きていてくれて良かったと思いました。



■映像化されて良かったと思う見所のシーンはどこですか？

ロケ地は北海道、山梨、太秦へ行きましたが、中世城郭である忍城が再現されているのは感動的でした。忍城を作っている最中からロケハンの写真も見せて頂いたのですが、最初は土木工事のような感じでブルドーザーなどで土塁や堀を作ったりするんです。その何か月か後に芝生が生えて出来上がった写真を見ていると「いい大人が何しているんだろうなあ」と感じました（笑）。しかも、僕が文字で書いたばかりにそんなことになっているので、申し訳ないなあという気持ちですよ（笑）。見所は沢山ありますが、再現という意味では合戦シーンですね。あとは冒

頭で忍城を佐藤浩市さん演じる正木丹波が走り回るシーン。現実に忍城が再現されて人間が走っていることに感動しました。

■映画ならではの変更点はありますか？

あまりに長すぎるので切ったことと、予算の関係で変更したことですかね（笑）。他に、萬斎さんの「田楽踊り」のシーンですね。実は元々の脚本では昼なんですけど、犬童監督が夜にしたらどうかと仰って変更になりました。これは盲点でしたね。何で俺は思いつかなかったんだろうと、ちょっと恥じ入るくらいの気分でした。これを夜にやろうというのは映画的ですね。

■これから映画を観ようとする人へコメントをお願いします。

僕が脚本を書いたときの狙い通り、老若男女問わず楽しめる本当にシンプルなエンターテインメントに仕上がっているので、皆さんには、ただ楽しんで観てもらいたいです。面白かったら手を叩いて喝采してもらいたいです。また、より深く楽しむためとして、この人物たちが400年前に実際にいた人たちなんだと念頭に置いて観てもらえると、何か別種の趣きがあるかもしれません。



プロフィール

◆脚本：和田 竜

1969年、大阪府出身。03年に、映画脚本「忍ぶの城」で第29回城戸賞を受賞。07年、その脚本を小説化した「のぼうの城」（小学館刊）で作家デビュー。同作はベストセラーとなり、第139回直木賞にノミネート、09年本屋大賞2位を受賞。第2作目「忍びの国」（新潮社刊）で第30回吉川英治文学新人賞候補、第3作目「小太郎の左腕」（小学館刊）で第23回山本周五郎賞候補、現在は週刊新潮にて「村上海賊の娘」を連載中。

映画『のぼうの城』公開記念 原作・脚本 和田竜インタビュー

<http://p.booklog.jp/book/58973>

著者 : nobou-movie

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/nobou-movie/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58973>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58973>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ